
冥府の剣

梅院 暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冥府の剣

【Nコード】

N4599W

【作者名】

梅院 暁

【あらすじ】

元警察官、真智明は、殺人の罪により死刑を求刑される。刑は執行され、男は死んだ……はずだった。男が再び目を覚ましたとき、そこで新たな役割を与えられる。男は名を捨て、世を蝕む悪を討つ剣となる……

序章

男は、暗く狭い個室の中にいた。

男一人通り抜けることも出来ない小さな穴に格子が嵌められた窓から差し込む月明かりが、唯一の光だ。

部屋の中にあるのは、寝心地の悪いマットと、簡易なトイレのみ。そこからの異臭が鼻を突く。

コンクリート剥き出しの壁の向こうから、叫び声が休むことなく響く。

男はただ黙って膝を抱え、蹲っていた。

廊下から足音がする。

そろそろ看守による見回りの時間だっただろうか。

足音はどんどん大きくなり、突如止まる。

男は顔を上げた。

目線の先に、制服を着た男二人が立っていた。

一人は壮年で、見下すように視線を向けている。

もう一人は比較的若い男だった。ひよっとしたら、自分と歳が近いのかもしれない。

その眼は、何故か侮蔑ではなく、むしろ興味だろうか――なんとも形容し難い視線を鉄格子越しに向けている。

「真智明」

壮年の方が、自分の名を呼んだ。

特に反応をするわけでもなく、ただ睨み返すと、その男は顔を顰めながら、

「貴様の刑執行は、明日午前十時と決まった」

と、宣告する。

明は、それを聞いても動じなかった。ただ、「やっとか」と心の隅で思った程度だ。

そんな態度が不服だったか、男は眉間に皺を寄せ、踵を返す。

明も話は以上か、と再び顔を俯うつむけようとした。

「しかし、分らんねえ」

先程まで壮年の後ろに立っていただけの男が、いつの間にか鉄格子に手を掛けながら話しかけてきた。

「この男の罪状って……殺人、でしたっけ？」

「それがどうした。人の命を奪ったのだ。重罪には違いない」

「ええ、そりゃあ分かってますがね……それでも、人一人殺しただけで死刑は重すぎやしませんかい？」

「貴様、それは問題発言だぞ！」

壮年の方が声を荒げた。

「場合によっては、人命を軽んじていると見なすぞ！」

「明日には俺達の手で死ぬ奴の目の前でそれを言いますか？」

男に悪びれた様子はなかった。

「俺が言いたいののはですねえ、酌量の余地ぐらいはなかったのか、つてことですよ」

「そんなことは我々が考えることではない。裁判の結果だ」

「裁判、ね。」

「そういえば――」

すると、その男は人の悪そうな笑みを浮かべ、

「あんな裁判もあるんですね……検事が被告に対してひたすら極刑求めて、本来被告を擁護するはずの弁護士が明らかに勘違いされかねない際どい発言で逆に追い込まれ……挙句には裁判員全員の判決が求刑ですか」

明は目を見開いた。

何故そのことを知っているのか、という無言の問いに男は気付いたらしく、

「ああ、俺その裁判のとき傍聴席にいたもんでね。」

それにしても、第一審で極刑も珍しいよなあ……さらに驚きなのが――」

「止めろ」

あきら
明は男の言葉を遮った。

「すでに刑の執行は決まったんだ。今更何を言おうとどうにもならない。

それに……俺のせいで人が一人死んだことは事実だ」

久々に、独白にも似た長い言葉を吐き、再び口を閉ざす。

男は、じっと見ていたが、

「お前、馬鹿か？」

「何？」

男は先程とは一転、冷めた目で明あきを見ている。

「お前、ひよつとしてあれか？ 死んでも自分の誇りは守られます。だから、何を言われようが、何ともありません、ってか？

ふざけんじゃねえ」

突然変わった男の雰囲気、不覚にも明あきらは飲み込まれていた。

「死人に口なし……死んだ奴は何も言うこともねえ、そして何も出来ねえ。

死んだところで、守られるものなんざ何もねえんだよ！」

「おい、いい加減にしろ！」

ついに、壮年の方が怒鳴った。

男は肩を竦めながら、

「こいつは失敬。これから死ぬ奴に説教なんか意味ないか」

そう言い残し、男は目の前から去っていく。

——何なのだ、あの男は。

あきら
明は呆気まどろみに取られていたが、すぐにかぶりを振った。
睨まじが重い。

どうやら、先程の言い争いで疲れてしまったようだ。

睡魔が襲い来る中、明あきらの頭では止めどなく考えが浮かんでは消える。

——死んだところで何も出来ない？

——なら、この状況で何が出来るというのか？

あきら
明の体が前後に揺れ始める。

——出来るのは明朝の刑執行を待つだけだ。

——他に出来ることは……

諦観を決め込んでいたはずの明の脳裏に、一つ自虐的なアイデアが生まれた。

——脱獄か？ 馬鹿な……そんなこと、出来るはずが……

そこで、明の思考は止まった。

——翌日、午前九時五十分——

ついに、死刑囚、真智明まぢあきらの刑執行が近づいていた。

ボサボサの髪に、顔中に無精髭が伸び放題の男の前には縄が天井から垂れている。ちょうど男の顔の位置で輪に作られている。

日本の死刑制度において、処刑法は電気椅子でもガスでもない。

絞首だ。

男の首が、執行官の手によって輪をくぐらせられる。

確認が終わり、ブザーが鳴った。

これは執行人にとってはただの合図。

男にとっては、死の宣告。

執行官が男の背を押した。

男の足から、床を踏む感覚が消える。

代わりに、縄が男の首に食い込んだ。

死を受け入れようとしていたはずの男は、その瞬間、すでに手錠が外されていた両手を首に伸ばし、抗おうとする。

だが、それも僅かな間だった。

やがて、男の両手が、地面に向けだらりと垂れる。

——午前十時、刑は執行され、一人の男がこの世から消えた。

序章（後書き）

感想、意見等お待ちしております。

第一話　く目覚めた先はく

男は、暗い中を彷徨さまようっていた。

無限に続くかと思われた、その空間の先に女が一人佇んでいた。

彼女は背を向けて立っていたものの、明あきらにはすぐに分かった。

それと同時に理解する。

彼女がいるということは――自分も死んだということか。

明あきらは彼女の名を呼ぼうとしたが――

彼女は遠ざかっていった。

明あきらは必死に追いかけてようとするも、距離は縮まるどころか広がっていく。

ついには、彼女の姿が見えなくなったところで――

明あきらは目を覚ました。

明あきらの目に最初に飛び込んできたのは、真っ白な天井だった。

耳には、何かの電子音が届く。その正体を確かめるために横を向くと、心電図が規則正しく波を刻みながら、一定のリズムで音を鳴らしている。

そして、動いたことで自分の身体が様々なコードに繋がれていることに気付いた。左腕には点滴のチューブが刺さり、胸に張られた電極板が、心電図のモニターとコードで繋がっている。

明あきらが困惑していると、

「おっと、ちようどお目覚めか」

声のした方に視線を向けると、壁際に男が立っていた。

その男は腕時計を見ながら、

「午前十時、真智明死亡――どうだ、あの世に來た感想は？」
と、茶化して言う。

その男の顔には見覚えがあった。処刑の日時を伝えられた後、長

い間話しかけてきた男だ。

明^{あきら}が何か言い返そうとすると、ノックの音が響いた。

「どうぞ」

何故か、男が許可を出し、扉が開かれた。

入ってきたのは、三十代後半から四十代前半と思われる男性だった。

僅かに白髪の混ざった髪は短く揃えられ、彫りの深い顔であり、鋭い眼光をもってこちらを見据えている。

「目が覚めたのか」

先ほどまで軽い調子でいた男は、姿勢を正して敬礼しつつ、こう言った。

「ついさっきのことです。わざわざ報告の前に来なくても……」

「いや、解毒剤を打ってから一時間経ったのだ。そろそろだろうとは見当がついていた」

明^{あきら}は男達の会話についていくことが出来ず、首を傾げる。

——そもそも、ここは何処で、彼らは何者なのだろうか？

幸いにも、その疑問を呈する前に、壮年の男が答えてくれた。

「申し遅れたが、私は防衛省特殊介入部隊所属、勝連武^{かつらたけし}だ」

「同じく、勇海新^{ゆうみあらた}だ、よろしくな」

そして、比較的若い男の方も名乗った。

「さて、まずは君の現状を説明しなければならない……単刀直入に言おう。」

君は、五分前に死んだ」

明^{あきら}はそれを聞いても特に表情を変えなかった。

「肝が据わってるといふか、ノリが悪いというか……もう少し分かりやすい反応してほしいな」

「そんな気分じゃない」

残念そうな顔でばやく新^{あらた}と、真顔で返答する明^{あきら}——どちらを見て呆れたのかは分からないが、武^{たけし}は溜め息を吐^つき、

「死んだ、とはいっても表向きの話だ。少なくとも、真智明^{まろ あきら}という

男は、本日午前十時に刑が執行され、この世にはすでに存在しない」
「だが、今俺は普通に話してるし、こうして身体も動くようだが？」
そう言い、明は右腕を上げ下げし、右手を握ったり開いたりして
見せる。

「ちよっと端的過ぎたか？ 言い方を変えりゃ、適当に見繕った別の死刑囚があんたの代わりに処刑されたんだよ」

答えたのは、武ではなく、新の方だった。

「……質問いいか？」

「どうぞご自由に」

「どうやって俺を牢から出した？」

「ああ、昨夜、看守に化けた俺があんたと長話しているときに、あんたの部屋に気化した薬を充満させたのよ」

明は顔を顰めつつ、「薬？」と疑問系になってない文法で尋ねる。

「おう。そいつは、うちの科学班特製のものでね、そいつを一定量吸った人間は、たちまち仮死状態に陥っちゃうのさ。そいつは別の薬品で中和するまで起きることもない。」

そして、眠っちゃったあんたと身代わりを、それぞれの部屋に移し換える。それなりに体格が似てる奴を選べば、髪も髭も伸び放題だから、パツと見でバレる心配は無え。

あとは、身代わりが元々いた部屋に、仮死状態で転がっているあんたを今朝見つけ、偽装した救急車に乗せて……現在に至るわけよ」
「……もう一つ、いいか？」

「おう、じゃんじゃん来い！」

「何故、俺を助けた？」

その問いに答えたのは、新ではなかった。

「君には、我々の仲間になってもらいたい」

武の言葉に、鼻で笑い飛ばしやりたくなった。

「ふざけてるのか？ 俺は殺人犯で、死刑囚だぞ？」

「そして、我々の求めている人材でもある」

「俺の何を知っているというんだ！」

ついに耐え切れず、明は声^{あきら}を荒げた。

逆に、相手は落ち着いた様子で、

「真智明^{まぢあきら}二十五歳。二〇一〇年八月二十六日生まれ、血液型はA、千葉県出身——」

明は目を見開くが、相手は気にも留めた様子なく続ける。

「——中学、高校時代ともに剣道部に所属、インターハイにて個人団体ともに千葉県代表に選ばれ、団体戦優勝、個人戦も三位の好成績を修める。玉竜旗全国高等学校剣道大会への代表選手として出場経験もあり、現在の段位は五段。」

大学へは剣道の推薦によって進学、この頃から柔道や空手に手を出し始め……こちらも段位を獲得。

大学卒業後は警察学校に合格するも、射撃の適性が低く、本人が希望していた機動隊への道は断念、千葉県警察の刑事部に配属。

二〇三五年七月、とある暴力団の麻薬経路の壊滅に多大な功績を挙げ、巡査部長への昇進が決定される。

しかし、同年十月、千葉県内で起きた交通死亡事故にて——」
相手の話す履歴があ^{あきら}の忌わしい事件に差し掛かったところで、明は歯が砕けんばかりに噛み締める。

「——偶然、その現場に居合わせた君は、事故を引き起こした被疑者を取り押さえようとしたが、所持していた拳銃が暴発、被疑者は死亡、その刑事責任を問われる裁判にて死刑を求刑され——」

「よく知っているな」

皮肉を込めて放った一言も、相手は意に介さず、

「これが我々の仕事なのでな」

明^{あきら}が睨みつけても、悠然とその敵意を受け止めていた。

「仕事、か……さっき、防衛省とか言っていたな。まさか、自衛隊絡みか？」

「いや、我々は自衛隊とは違う」

「そもそも、表向きは実在しないことになってるからな……今のあんたと同じでな」

二人はそう言って一時的に口を閉ざした。

これ以上詳しいことは言えない、ということか。

「最後の質問だ……俺に、拒否権はあるのか？」

特に期待せずに問いかけると、予想外の答えが返ってくる。

「ある。」

しかし、それはあくまでも入隊の是非だけだ。

そして、君は生きているはずのない人間だから、どちらにせよ保護プログラムに従ってもらうことにはなる」

つまり、脱獄した時点で自分の取れる選択肢は二つに絞られてしまったわけか。

一つは、存在しない人間として、保護プログラムによって影に隠れて暮らす道。

もう一つは、特殊介入部隊という実在しないはずの組織の一員として、働く道。

「さあ、こちらも最後の質問というふうか。」

君は、どうする？」

——結局のところ、自分は一度死んだ身、存在が抹消された者……

「俺は……」

明は、後悔さえ許されない決断を下した。

第一話　く目覚めた先はく（後書き）

感想、意見等心よりお待ちしております。

第二話 く墓参りく（前書き）

この物語はフィクションです。

作中に登場する人物、組織等の固有名詞は、実在するものと同一としても一切関わりありません。

第二話　　墓参り

北からの風が、コートの裾をなびかせながら吹き去っていく。
目深にかぶったソフト帽が飛ばされないように手で押さえ、男は歩く。

その腕に白い花束を抱いて……

鏡の中から、一人の男がこちらを見返している。

長い間牢に閉じ込められていただけあって、以前よりも痩せ細っているものの、鍛え続けたおかげか武骨さは抜け切っていない。

むしろ、殺げた頬と完全には衰えなかった筋肉が、己の本質を語っているようにも思えた。

短い黒髪をオールバックにし、太い眉の下で鋭い切れ目が光る。

「お、随分とすっきりしたな」

声のした方に向けば、両手で荷物を抱えた勇海新が部屋に入ってくるところだった。

真智明は肩を竦めながら、

「まあ、剃る前は自分でもむさ苦しく感じたからな」

先程、部隊に所属している美容師の手によって、伸び放題の髪を切り、髭を剃り落としてもらったところである（興味本位で何故美容師がいるのかを尋ねたところ、潜入任務や護衛任務に赴く隊員の容姿を場に合うものにするためだと教えてもらった）。

「ところで、それは？」

「ああ、あんたの着替えと、うちで用意した身分証明書なんかだ」

そう言い、新は近くの机の上に置く。

明は試しに免許証を見てみた。

驚いたことに、どこで入手したのか、自分の証明写真が貼られ、生年月日なども同じだ……ただ一転だけ、以前とは違う点があった。「書かれている名前が違うようだ？」

「当たり前だ。あんたはすでに死んだことになってんだ。

しかも、以前の職業が職業だし、少なからず報道もされた。いつでもどこで以前のあるたを知る人間に出くわしてもおかしくない。最初は慣れないと思うが、名乗るときはそっちの名前を使え」

そこまで言われれば納得せざるを得ない。

あきら 明はとりあえず着替えようとして……再び手を止めた。

「なあ、この帽子は？」

「ん？ ソフト帽」

「いや、帽子の種類じゃなくて……なんで当たり前のように着替えの中に混ざっている？」

それを聞いた新が溜め息を吐き、

「さっきも言っただろ、あんたはすでに死んだ身だ」

「そうだな」

「だが、死んだ人間と同じ顔が歩いているのも問題だろ？」

「まあ、そうだが……」

「だから、隠せ」

「は？」

あきら 明は間の抜けた声を出してしまった。

「言っている意味がよく分からないが……」

「そうか？ じゃあ今度は分かりやすく言ってやる……外に出るときは常にその帽子で顔を隠せ」

「……拒否権は？」

「無い」

「いやいや……むしろ、不審者に思われて職務質問される気がするが？」

あきら 明の前の職業は警察官である。なので、帽子をかぶった、見るかに怪しい自分が警察官に目を付けられることが容易に想像できた。

「だろうな。俺も何度かあった」

あらた 新の声には、諦観があった。

「……拒否権は？」

明は再び同じ質問をした。
あきら

「無い……俺達には」

何か釈然としないものを感じつつ、仕方なしにさっさと着替える。
着替え終わったところで、別の部屋に行っていたはずの勝連武が
入室した。

「サイズは合ったようだな」

「一応は……で、これから私はどうすれば？」

「焦るな。」

さすがに、入ってすぐに任務というわけにもいくまい。

まずは拘置所にいる間に付いた身体の錆さびを落としてももらう。その
ためにこちらの指定した訓練施設に向かってもらいたいのだが……
そこで武は言いよどむ。
たけし

「何か問題でも？」

「うむ、先方も別の任務があったから、来るなら二時過ぎにしてく
れと言うのだ。」

そして、悪いことは重なるのか、その時間帯は送迎用の人員を割
けない」

「そういや、脱獄に参加したメンバーも、医療班の磨志葉先生以外
すぐに別の任務に飛んでいましたしね……」

「そうだ、勇海ゆうみ。まさか、磨志葉ましはに送らせるわけにも行くまい。

そういうわけだから、待ち合わせ場所で先に待機し、先方に迎え
に行ってもらおう。向こうにも、これ以上文句は言わせん」

「はあ……じゃ、待ち合わせ場所までは俺が送つときますよ」

そう言い、新あらたが明あきらを引き連れて出て行こうとした間際、

「待て、勇海ゆうみ。途中で、線香と献花を買って彼に持たせてやってく
れ」

と、武たけしがその背に向かって言う。

あらた
新は嘆息し、

「経費扱いにしますよ」

と言に残して出て行った。

「放してください！」

静寂を保っていた墓地に悲鳴が上がった。

見れば、墓地の一角で、男が二人がかりで、一人の女性を囲んでいる。

最初「こんな場所でナンパとは不謹慎な」と思ったものの、男達の方は、職業柄よく見た人間だった。

「渥美さん、困るんですよ、いい加減払ってもらわないと」

「いい加減にしてもraithたいのはこっちです！ 私が借りたわけじゃないと、言ってるじゃないですか！」

「何を言ってるんですか？ 借りたのは、貴女の恋人なんですよ？ 死んだ恋人の借金を返すのも恋人の務め、でしょ？」

男どもの方は、質の悪い金貸しの一種であることが会話から察せられた。

「面倒だ、事務所連れて行くぞ！」

「へい！」

どうやら、男達は強行手段に出るつもりのようなだ。

情けない話ではあるが、明は彼らあきこに関わろうという気は無かった。というのも、先程の忠告があったからだ。

自分は本来ならこの世に存在しない。

今頃は、目の前に広がる墓石の下にいるはずだった存在。

だからこそ、世間に出来る限り関わりを持つべきではない。

そんな思いが、誘導するように足を別の方向に動かそうとしていたが――

男に手を掴まれ、その顔を恐怖に染めた女が視界の端に留まった瞬間――

自分の心の奥底で何かがカッと燃え滾たぎるのを感じた。

第二話　く墓参りく（後書き）

感想、意見等お待ちしております。

第三話　く追憶、そして罪く

それは、元警察官としての義憤か。

それとも、人を死なせたことに対する罪悪感と後悔か。

いずれにせよ、分かることは一つ——自分が、怒りを感じているということだ。

あの事件で、鉄格子の中に閉じ込められると同時に、心の奥底に押し込めていた感情が、自分の身体を突き動かす。

「その手を放せ」

男達が振り向いた。

「ああ？　何だてめえは！」

「俺達が誰か分かってんのか？」

恐ろしい形相で凄む男達ではあったものの、それぐらいでは引き下らない程度には、明も場数を踏んではいるつもりだ。

「少なくとも、俺の知り合いにお前らみたいなガラの悪い奴はいないな」

首を傾げ、軽く挑発してやると、一人が、

「嘗めてんのか、てめえ！」

と、殴りかかってきた。

明は相手の拳に速度が乗る前に、相手の手首を右手で掴み、捻り上げる。

男が痛みに悲鳴を上げた。

「て、てめえ、兄貴に何しやがる！」

女を捕まえていた方も加勢しようとした。

明は左手の花束を捨て、同じようにもう一人の腕を捻り上げた。

そして、百八十度位置が入れ替わるように回り込み、二人を投げ捨てる。それによって、ちょうど女が明に庇われる形になった。

「この野郎、もう許さねえ！」

兄貴分が立ち上がり、懷から合口を抜いた。

いきなりの行動に、一瞬明の動作が遅れる。

明のかぶっているソフト帽のつばに切っ先が当たり、帽子が頭から飛んだ。

背後で女が悲鳴を上げる。

そのまま、相手は合口を振り下ろそうとするが、その前に、明は拳を突き出した。

正拳突きが男の顎を捉え、男が吹っ飛んだ。

男は地面に叩きつけられ、気を失う。

弟分はそれを呆然と見ていた。

「まだやるか？」

ここは墓だから、埋められるのが一人二人増えたって困らないと思うが？」

男が後ずさった。

その目からは、先程までの戦意を感じられない。

「その寝てる男を連れて失せろ。そして、次からは場所つてものをわきまえるんだな」

「お、覚えてやがれ！」

彼らのような人種特有の捨て台詞を残し、男は気絶しているもう一人の男を抱えて走って行った。

明が一息吐き、振り向く。

すると、件の女性が落ちていた帽子を拾い、

「危ないところを、ありがとうございました」

と、帽子を差し出した。

明は帽子を受け取り、つばの一部が切り裂かれているのに気付く。

——初日から支給品に傷を付けたか……

思わず顔を顰めると、女性はそれをどう捉えたのか、

「あの、ひょっとしてお気に入りのものでしたか？ それに、見たところ新品のようですが……」

と、心配そうに声を掛けてきた。

明は努めて笑顔を作り、

「いや、そういうわけじゃ……それよりも、貴女の方は？ 怪我などしてませんか？」

「いえ、私の方は大丈夫……です」

女性の方は、未だ帽子のことを気にしているのか、申し訳なさそうに目を伏せた。

明は帽子を被り直し、落ちていた花束を拾うと、

「先程の連中がその辺りをうろついているかもしれません。気を付けて」

と、まだ何か言いたそうな女性に背を向け、再び墓地へ向け歩き出した。

明は憮然としていた。

まさかとは思っていたが、彼女の親戚達は形ばかりの墓を建て、それっきりの状態だったようだ。薄汚れた墓石と枯れ果てた状態で添えられた花がそれを物語っている。

明は持ってきた花と替え、桶に汲んでおいた水で墓石の汚れを取る。

ようやく、墓石に刻まれた名前がはっきりと見えるようになった。
村雨彩佳——明の婚約者だった女の名だ。

彼女は、去年十月の交通事故でこの世を去った。

彼女の死は、連行された刑務所で聞いた。

彼女の葬式が行われたとき、自分は判決を待っていた。

涙は流れない。彼女のために流す涙は、拘置所の中ですでに枯らした。

明は線香に火を点けようとしたところで、ライターやマッチの類を持っていないことに気付く。

「使いますか？」

背後から声が掛けられた。

振り返ると、まず目に着いたのが、細い指に握られたライターだった。さらに、黒い長髪が風になびいている。

墨色の細い眉の下には、大きいものの、柔和そうな眼がこちらを見つめている。

明は声の主が、先程助けた女性であることに気付いた。

ライターを受け取り、線香に点火し供える。目を閉じ、合掌した。それから、どれ程の時間が経っただろうか。

明が眼を開けると、件の女性も墓前に手を合わせていた。

彼女の意外な行動に虚を突かれて見ていると、

「ご迷惑でしたか？」

こちらの視線に気付いたか、女性が首を傾げる。

「いや、むしろあいつも喜んでくれていると思う……ありがとな」

明は礼を言いながら、ライターを返した。

女性は墓石を見つめながら、

「随分と長い間手を合わせてましたが、大切な方だったのですか？」と尋ねてきた。

何と答えようか一瞬迷ったものの、明は正直に答えることにした。

「そうだな……大切……だったな」

明は目を細める。

脳裏には彼女と過ごした日々がよぎっては消えていく。

——彩佳と出会ったのは、小学校の頃だった。

早くに両親を亡くした自分は、祖父母に引き取られ、その頃には剣道を祖父から教わっていた。

クラスメイトや上級生の中にも、剣道教室で祖父から学んでいた者が何人かいた。彼らにしてみれば、自分の存在はかなり鬱陶しかったのだらう——自分は、いつも陰湿ないじめを受けていた。

だが、その矛先が一時的に変わった時期があった。

彩佳が転校してきたときだ。

当初の彼女は常に暗い表情を浮かべ、クラスの中で孤立していた——後から聞いた話だと、当時の彼女は事故で両親を亡くし、親戚に引き取られたばかりだった。

あまり喋ろうとしないものだから、周りから無視されていた彼女

に連中は目を付け、自分が受けた程ではないが、散々嫌がらせをしていた。

その結果、自分に対して特に何もしてこなくなったものの、何人もの男子が女子を囲んでからかう様子は、情けなさを感じさせると同時に、怒りを沸かせるのに十分だった。

あるとき、その光景を見ることに耐えられなくなった自分は、ついに連中に自ら盾突いた。そして止めようとしなかった奴らに堪忍袋の緒を切らした自分は彼らを相手に大立ち回りをした。

結局のところ、多勢に無勢で袋叩きにされたものの、それ以後、彩佳は自分に対しては笑顔を見せるようになった――

「あの……」

控え目な声が、自分を現実呼び覚ました。

何事かと女性の方へ向けば、女性の手にはライターの代わりにハンカチが握られている。

「これ、使ってください」

彼女の意図するところを察し、手を顔に持っていくと、いつの間にか頬が濡れていた。

「あれ、おかしいな……泣くつもりは、なかったのに……」

明の口から掠れた声かすが漏れた。

「大切な人だったんですね」

「……まあな」

明は乱暴に涙を拭くぬぐ。何とか口を笑みの形に持っていこうとするが、自分が笑えているか、怪しいものだ。

思えば、あの頃から自分の隣には彩佳さやかがいて、いつも笑っていた。しかし、彼女はもういない。あの笑顔を見れる日は二度と来ない。頭では分かっていたはずの事実を改めて認識したことで、一抹の寂しさを、悲しみを感じたのだろうか。

明は瞼あきこを閉じる。

――死んでいるはずの自分がここにいることを、彼女は恨んでいるだろうか？

だが、記憶の底から呼び覚ました彼女の顔は微かに微笑んでいるように見えた。

あきら 明が再び目を開けると、案じ顔で見ている女性に笑みを向ける。

「悪いな、初めて会ったばかりなのに、迷惑かけちゃって」

「いいえ、迷惑だなんて……それでは、私も墓参りに来たので、ここで失礼しますね」

「そっか」

ここで、この女性が先程彩佳さやかの墓前に手を合わせてくれていたことを思い出し、

「これも何かの縁だ。俺も手を合わさせてもらってもいいかな？」

「え……」

女性は目を見開き、何かを言いかけたものの、思い直したように首を横に振り、

「そうですね。拒む理由ありませんし」

あきら 明は愕然としていた。

女性に付き添い、移動した先の墓には一人の男の名が刻まれている。

おきてつや 沖鉄也——それは、明あきらが殺した男の名前だった。

第三話　く追憶、そして罪く（後書き）

感想、意見等お待ちしております。

第四話　俺の名は

——あの日、明は彩佳と一緒に昼食を摂った後、彼女を職場に送り届けた。

会社の前で別れた時も、彼女は笑っていた。そして、それが明の見た最後の顔となった。

「彼、人を撥ねたんです」

明の意識は、その言葉で現実に戻された。

女性は、沈鬱な表情で続ける。

「十月のことです。当時はニュースでも大きく取り上げられたから、貴方も知っているとは思いますが……」

女の言葉が明の耳に入っては通り抜けていく。

知っている、などと言いで片付くようなことではない。明はその事件の当事者だったのだ。

「警察が言うには……彼は——鉄也は、一人の女性を交通事故で死なせて……そこには、その方の婚約者がいて……その人は刑事で、拳銃を持っていて……」

女の語りは、明にとっても忌わしいあの事件の核心へと迫っていくに連れ、弱まっていく。

明は、止める、と胸の内と思う。

だが、口に出せなかった。そんなことをすれば、己の罪から逃げているのと同じになってしまうのではないか——そんな脅迫概念が、思い留まらせたのだ。

「鉄也は……逆上したその婚約者の方に、射殺された、と」

ついに、彼女の目から涙が溢れた。

明は動かなかった口をなんとか開き、

「……貴女にとって、その……鉄也さんは、どういう人だったんだ

「？」

と、思わず聞いてしまった。そして、自分は何を言っているのか、と思い返した。

こうして彼女が墓参りに来て——涙を流している以上、彼女にとって、彼は大切な人であったことは間違いないではないか。

慌てて今の問いをなしにしようとするが、彼女の方が早かった。

「……将来を誓い合った仲でした」

今度こそ、明の全身は凍りついた。

明は思い返した。

鉄格子に隔てられた個室に入れられた後、殺した男のことを振り返り、己の罪を自覚している気でいた。

しかし、その男の死に涙する人間のことは全く頭に浮かばず、ただ牢の中でその身を固くし、無気力にその日その日を過ごし続けた。今、目の前で涙を流している女を見るまで、自分が彩佳の死を悲しんだように、彼の死を悼むものがあることを完全に失念していた。

——自分は何と愚かだったのだろうか。

不意に、今立っている地面がグニヤリと歪んだ気がした。そのまま、地の底に引きずられていくような錯覚。まるで、この地に眠る死者達に、あるのかも分らない冥府へ誘われるような——

明が自己嫌悪に陥っている間も、彼女の

「あ、ご、ごめんなさい……初めて会った人に、こんな……」

「——いか？」

「え？」

ふと明の口から言葉が漏れたが、ちゃんと聞こえてなかったらしく、女性は聞き返してきた。

迷った末、今度は女性に聞こえる音量で明は問う。

「憎いか？ 貴女の……大切な人を殺した……その男のことが」

彼女は絶句し、明を見つめる。その視線に耐えられず、明は眼を逸らした。

——自分は本当の大馬鹿野郎だ。そんな当たり前のことを聞いて

どうするといふのだ。

さらに明^{あきこ}が自分を責めていると、彼女の口からは予想もしなかった答えが返ってきた。

「今朝、その人は処刑されたそうです」

明^{あきこ}の胸に、小さな疼^{うず}きが生まれる。

――違う。死んではいない。貴女の大切な人を奪った男は、今も目の前にいる……

今、この事実を彼女に伝えるべきだろうか？　だが、伝えてどうしようというのか？　憎めと？　それとも、逆に許しを請うのか？

いずれにしろ、彼女を傷つける結果になるだけではないのか……
明^{あきこ}の迷いを知ってか知らずか、彼女は続ける。

「今日、ここに來たのも、そのことを鉄也^{てつや}に報告するためでした……」

そう言い、彼女は膝を抱え、一心不乱に墓石を見つめる。

どれほどの時間が経っただろうか。

彼女が再び立ち上がる。

「……質問への答えがまだでしたね」

彼女は、明^{あきこ}に向き合う。

「私は……その人を恨んでいました」

明^{あきこ}の胸の奥が痛む。

「確かに、鉄也はひどいことをしました。それでも、何故捕まえずに殺したの、と……何度も何度も思いました」

女は顔を伏せた。

明^{あきこ}は口を開こうとするが、何を言っているのか分からず、口籠^{くろう}つてしまう。

彼女を傷つけたのは自分だ。

なら、自分に何が言えるのか。

後ろめたい思いで立ち尽くしていると、女が顔を上げた。

「ですが、貴方に改めて聞かれて……思っただけです。もうその人は死んでしまった……自分が恨んだ人間は、この世にはいないと……」

そんなことを考えたら、虚しかった」

明は気付いた。

彼女の顔に先程までの陰りがなかったことに。

「私はどうすればいいのか、どうしたいのか……それは分りませんが、死んだ人を恨むことは、意味のないことのように思います。だから――」

「――強いな、君は」

「え？」

明の言葉に虚を突かれたか、女は目を丸くした。

「いや、なんというか……ちよつと自分が情けなく思えてな……」
「い、いえ……貴方のおかげです。貴方が聞いてくれなかったら、このことを考えることもなかったと思います。ありがとうございます」

そう言い、女は微笑む。

その笑顔に、明は不覚にも目を奪われてしまった。

かつて、彩佳さやかが生きていた時、彼女は自分の隣で笑っていたが、それとは違う魅力があるように感じた。

だが、幸か不幸か、見とれている時間は長くなかった。

明の胸に伝わるバイブレーションが、支給された携帯電話が鳴っていることを知らせてくる。

腕時計で時間を確かめてみれば、もうすぐ待ち合わせの時刻だった。

「すまないが、この後用事があったんだ。俺はこの辺で失礼させてもらう」

「そうですか……あの！」

踵を返しかけた明を女が呼び止める。

「私は、渥美瞳あつみひとみと申します……貴方のお名前は？」

「俺か？ 俺は……」

ここで、渡された証明書などに書かれていた今の自分の名前を思い出す。

——そう、真智明まち あきらという男は死んだ。死人は存在してはならない

……

「真……明智真まち あけちまこと、それが俺の名だ……それじゃ、これで」

そう言い残し、女に背を向け、墓地から離れて行く。

——このとき、真智明まち あきらという男は、死んだ。

第四話　く俺の名はく（後書き）

後書きは後から追加します。

第五話　く暗躍する者く（前書き）

後書き、始めました。

第五話　（暗躍する者）

男は海を見ていた。

眼下に、空の色を映した水面に、陽光が反射している。

普段ならその美しさに心奪われるのであろうが、今はそんな気分
に浸ることはできない。

すぐ横を見れば、半ばから折れ、ひしゃげたガードレール、そして右前部が凹んだ大型トラックが目飛び込む。周りには、ガラスやライトの破片が散乱している。

男は、今朝起きた二つの事件の報告内容について考え始めた。

一つ目は、目の前の事故現場に関わるものだ。

本日午前七時頃、拘置所内で死刑が確定されている囚人の一人が冷たくなっているのを看守の一人が発見した。

死因を調べるため、ただちに搬送用の車両が手配された。通報後、間もなく来たそれに看守一人を付けて送り出した。

それは、巧妙に仕掛けられた罠だった。

出した直後、別の搬送車両が来たことで、先に来た車両が偽物であることに気付き、追っ手を差し向けた。

幸いにも、まだ近くを走っていたその車両を見つけ、激しいカーチェイスが展開された。

だが、終幕は呆気なく訪れた。

崖沿いの道を猛スピードで走っていた偽装車両は、対向車線を走ってきたトラックを避けきれず、ぶつかったはずみにガードレールを突き破り、崖下の海へと落下した。

現在も車両の搜索が続けられているが、多くの者が「あれでは誰一人助からないだろう」という見解を示している。もしその推測が正しければ、その件は終わりだ。

そして、もう一つの事件。これは、本日午前十時、別の囚人を処刑していたときに起きたことだ。

「隊長」

そのとき、背後から声が掛けられた。振り向けば、警官達とトラックの運転手の事情聴取をしていた部下が、スーツの襟を正し、こちらに近づいてくる。

「どうだ？ 何か分かったか？」

「はっ、運転手の話から、少し奇妙な点が……」
「話せ」

「はっ、彼は普段別の道を通っているようなのですが、カーナビで事故が起こったことを知り、迂回路として表示された道を通ったら出くわしたと供述していますが――」

ここで、部下が地図を取り出し、広げる。そして、ある一点を指した。

「――調べた結果、この道では事故は起きていません。そもそも、この地点で事故が起きていたとしても、今いるこの道が迂回路になることはまずありません……実際に、この道より幅が広く、その時間帯で早く通れる道は、いくつもありました」
指した地点の周りの道をいくつか示す。

「……運転手が嘘を吐いている可能性は？」

「ありません。」

念のため、カーナビを調べてみましたが、確かに事故の情報が出されていたことが、履歴から分かります。つまり……」

ここで、部下は言いよどむ。

「かまわん、続けろ」

「はっ……結論として考えられるのは、何者かがあのトラックのカーナビに細工……いえ、むしろハッキングした可能性です。しかし、GPSの衛星通信に割り込むなど、相当な腕のハッカーでないとい出来ませんし、何より目的が不明です」

「……分かった。上には私から報告する。お前は調査に戻れ」

男が命ずると、部下は敬礼し、その場を去る。

男は見送ると、懐からあるものを取り出した。

透明な袋に入れられたそれは、今朝処刑された囚人の顔から剥がれたものだ。

絞殺された囚人は、その後十数メートルという高さから床に落とされる。これなら、仮に生き残っていたとしても、落下の衝撃で確実に屠れるのだ。

今朝処刑された囚人——真智明の顔は、落下の際、恐ろしい変化を起こした。

顔に貼られていた精巧な人工皮膚が剥がれると、そこには偽装車両で連れ去られたはずの囚人の顔が現れたのだ。

このことはすぐさま関係者内に箝口令が布かれ、こうして自分達も調査に駆り出されたわけだが……

——あの御方になんと報告するべきか。

そこで、携帯が鳴った。鳴ったとはいえ、マナーモードにしていあったので、バイブレーションが伝わるだけだ。

男は画面を見て嘆息した。噂をすればなんとやらである。

無視してやりたい衝動を堪え、電話に出る。

「もしもし、影山です」

『————』

「随分と情報が伝わるのが早いですね。いったい、その情報はどちらから？」

『————』

「……はい、結論を申しますと、奴はまだ生きている可能性があります」

『————』

「はい、もちろん心得ています。私の手で確実に始末します」

『————』

「無論です。決して先生の顔に泥を塗る真似は致しません」

『————』

相手は一方的に電話を切った。

第五話 〈暗躍する者〉（後書き）

＜冥府の剣第一章作成秘話および裏話＞

D・Wに引き続き、こっちでもやってみることにした。

もともと、この作品は、梅院がD・Wでスランプに陥ったので、スランプ解消のために別ジャンルを書こうと思ったのがきっかけで書き始めてます。まあ、D・W読んでた友人はほとんど読んでません。

まあ、そんなことはどうだっていいんです。問題なのは今なんです。

さて、唯一読んだ友人から言われた一言。

「『フライトプラン』臭がする」

……とりあえず、見たことないんで内容自体は知らないんですが。映画感想のサイトなんかを調べると、一応サスペンスらしいんですが……ああ、そういや何度か金曜ロードショーでやってましたね。一回も見たことありませんけど。

とりあえず、感想サイトを見てみると、大分ボロクソに言われていますね……まあ、私は一回も見たことないんで、これ以上言えませんが。興味ある方はググってみるといいと思います。私は一回も見ただけありません。

そして、そこで判明する事実。友人から見れば、冥府の剣はクソか。

……まあ、友人の主張をよく聞けば、主人公脱獄のトリックが酷かったらしい。

名探偵コナンを見習えとのことで……すいません、ここ数年あのアニメ見てないんですが……

結論…梅院はサスペンスを書くにはまだ詰めが甘すぎる。

<蛇足>

第四話で変わった、主人公の名前について、友人から一言。

「明智真って、『あきたこまち』からもじったんだよね？」

第六話　（訓練施設）

「明智真様あけちまことでいらっしやいますね？」

墓地を出たところで声を掛けられる。

真智明まぢ 明智真あけちまことの目の前には、一台のリムジンが止まっていた。

そして、運転席から初老の男性が顔を出している。

真まことはソフト帽を脱ぎ、頷く。

それを確認した男は、

「お迎えに上がりました。後ろにお乗りください」

と、乗車を促す。

言われた通りに、一番後ろのドアを開けると、そこにはすでに先客がいた。

まず目に着いたのは、朱華色はねずの生地はねずに白梅が染め上げられた着物。まだ一月下旬で、寒い時期が続いているが、その柄は少し早い春を感じさせた。

「遠慮は無用です。お入りなさい」

「失礼します」

真まことは後部座席に乗り込む。

車の構造上、自然とその女性と向き合う形で座る形で座ることになった。

——彼女が、自分の訓練を担当する人間なのだろうか。

自分よりは年上だろう。

相手は、特に身動きをしたわけではない。言葉も、一言のみ。

だが、その落ち着いた物腰から、只者でないことだけは察せられる。

落ち着いている、という印象から、先程会ったばかりの女性——渥美瞳あつみひとみがふと脳裏に浮かんだものの、彼女は落ち着いているというよりは、むしろ控えめと形容した方が正しいだろう。

一方、目の前の女性は落ち着いた中に艶やかさを感じさせること

で、全く別の印象を与えてくる。

「申し遅れました。私は喜三枝美妃わたくし きみえみきと申します」

——喜三枝きみえ？

その名には聞き覚えがあった。

だが、それほど重要ではないし、まさかという思いの方が大きかった。

だから、この場合は気にしないようにしよう……と真は考えたのだが、

「さすが、警察の方ですね。私の名前わたくしから、何か思うところがあつたようですね」

と、こちらの胸中を読んだかのように言う。

「……元、警察官です。それに、警察官だった真智明まろ あきらという男はすでにこの世に存在しない」

自分は、もはや別の人間も同義である……その事実を再認識するために放った言葉であったが、その言葉を発する自分自身に違和感を感じてしまう。

その思いを飲み下し、さらにこちらから問うことにした。

「ところで、訓練官の方はどのような方なのですか？」

現在、指定された訓練施設に向かっているはずだ。

たぶん、訓練官も施設の方で待機しているだろう……そう真まは考えていた。

すると、眼前の女性がクスリと笑い、

「どのような方、と聞かれましたも……貴方のすぐ目の前にいるではありませんか」

「……は？」

一瞬、何を言われたか分からない。

何とか気を落ち着かせ、意味を理解しようとする。

そのとき、車が停止した。

「明智様あけち、奥様、到着しました」

「ご苦勞様、瀬畑せはたさん」

車のドアが開き、美妃^{みき}が先に降りる。
真^{まこと}はホッとした。

タイミングよく着いたおかげで、会話に不自然な間が出来ることを免れたからだ。あのままなら、確実に返答に困っていたことだろう。

——逆に言えば、真^{まこと}がいかにあの女性を見た目で判断し、侮^{あなづ}つていたことを示しているのだが。

真^{まこと}は後に続いて車を降りた。

——ここは、いつの時代の日本なのだろうか。

初見^{まじ}で真^{まこと}が抱いた印象がこれである。

とりあえず、今の建築基準を満たしているのか、少し心配にもなった。

何故なら、目の前にある建物は、明らかに純和風の造りだった。

材質は見た限り木で、時代劇でよく見る、書院造の流れを汲んだ、いわば武家屋敷のような風貌だ。

もつとも、それだけなら真^{まこと}も、「製作者と住人の趣味」と思い込むことで片付けることが出来た。

——出来たのだが——

「お帰りなさいませ、奥様」

整列し、一斉に頭を下げる妙齡の女性達。

彼女達の言う「奥様」とは、美妃^{みき}のことを指すのだろう。ひよつとしたら、彼女の部下か、あるいは使用人か。

——「ひよつとして」と付けたのは、再び頭を上げた女性達の服装は、とある電気街の喫茶店で「お帰りなさいませ、ご主人様」と男性客をもてなすウェイトレス達が着てる紺色のワンピースに白いエプロンではない。

彼女達は、全員色や模様に違いはあったものの、着物姿だった。ほとんどが黒髪で、カチューシャの代わりに、結うかまとめるかした状態で簪^{かんざし}や櫛^{くし}で留めている。

木材で建てられた純和風の家屋の前に並ぶ着物姿の侍女達……こだけ時代が違うのではないかと真が錯覚しても仕方のないことであつた。

そして真がそんな不埒（？）なことを考えているのを知ってか知らずか、美妃が次々と指示を出す。

「まずは、彼を離れ屋へ案内して。それから、今の彼の实力を知りたいから、一息吐けたら道場へ連れてきて。道着と防具の準備は？ よろしい。それから――」

一通り指示が出されると、侍女の中から一人がこちらに近づく。

「明智真様でいらっしゃいますね？ 話は伺ってます。」

これから、訓練期間中に使用して頂く部屋へ御案内します。どうぞ、こちらへ」

訓練期間中の待遇は多少聞いていたため、案内されるまま付いていく。

最初に目に付いた大きな建物を迂回し、これまた書院造の家屋があつた。その建物は、渡り廊下のようなもので別の建物に行けるようになっていているが、一応玄関もあつた。

引き戸が開けられ、中に入り靴を脱ぐと、侍女の差し出したスリッパを履く。

侍女を先頭に、縁側を歩いていると、手入れの届いた松の木や、池、灯籠などの並ぶ庭が見える。

「こちらになります」

やがて、立ち止まり、侍女が障子を開けた。

部屋は、外見を裏切らないものだった。

床は無論畳で、柱や天井には木目が走り、違い棚や天袋（違い棚より上の位置にある、小さい押入れのような収納スペースのこと）、床の間（現在で使う床の間とは意味が違う）には掛け軸が掛けられ、壺が置かれている。

敷居を跨ぎ、出された座布団の上に正座すると、別の侍女が湯呑を持ってきた。

茶を喫すると、さらに衣服を持ってきて、

「奥様からの言伝ことづてです。」

落ち着いたら、こちらの道着に着替え、道場の方へ来てほしいとのこと。

準備が済み次第、控えている我々に声を掛けてくだされば、御案内いたします」

道場……とは、訓練施設を指すのだろうか。

真は茶を飲み切ると、襖ふすまを開けた。

襖の先は、別室になっていて、和室であることに変わりはないが、箆たんす、そして部屋に不釣り合いなPCといった家具や電子機器が置かれていた。

外を見た。

先程の言葉通り、障子が開けっ放しの状態で、侍女達が縁側に待機している。

真は道着まいしちを抱え、別室に移動し、襖を閉めた。

第六話 〔訓練施設〕（後書き）

後書きは後から追加します。

第七話　（試合）

道着に着替えた真^{まこと}は、再び次女に案内され、彼女達の言う「道場」に向かつていた。

「こちらになります」

――所見での感想は、「なるほど、これなら『道場』だな」である。

このときには、真^{まこと}の感性はすでに毒されていたのかもしれない。渡り廊下で移動していたために、正面ではなく、裏口の方から入ることになった。

建物の中は、百人以上入っても大丈夫なぐらい広く、床は完全に板張りだ。

「来ましたね」

声のした方向へ向くと、上座（と判断したのは、そこだけ高くなっており、彼女の背後の壁には何やら難しい四字の漢字が書かれた看板が掲げられていたからだ）に、一人の女性がいた。

喜三枝美妃^{きみえみき}その人である。

彼女が着ているのは先程までの朱華色^{はねず}の着物ではない。

剣道着の上から、面^{めん}と籠手^{こて}以外の防具を身に着けている。髪も装飾品の類は一切なく、邪魔にならない程度に結ってある。

「防具と竹刀は用意しました。準備が整い次第、試合を開始します」相手の宣言は唐突感があったものの、剣道着に着替えさせられたのでそれぐらいは予期していた。

それでも、真^{まこと}は敢えて問う。

「理由は？」

美妃^{みき}は「フフフ……」と声に出して笑い、

「私はデータだけを信じることが出来ない人間なので……実際に自分の目で見ないと気が済まないのです……」

その人の実力が知りたければ、実際に剣を交えればいい……違い

まして？」

「……なるほど、分かりました」

これ以上の言葉は不要だと思った。

真は用意された防具の前に正座し、垂、胴を順に着けていくと、傍らに置いてある竹刀を手に立ち上がる。

柔軟運動をし、竹刀を構えた。

右足を前とし、左足だけ踵を上げ、背筋を伸ばす。右手を上にして軽く添える形で握り、左手は握り締める。剣先は架空の敵の喉下に狙いを定め、竹刀を正眼に構える。剣道における基本の構えだ。竹刀を振りかぶり、振り下ろすと同時に、すり足で移動。

身に着けた一連の動きを何度かなぞり、徐々に体に思い出させる。最後に一度、竹刀を振り、残心を決める。竹刀を収めると、一礼し、残りの防具を着けに戻る。

その様子を美妃はじつと見ていた。

真は胴の紐の緩みを直し、頭に手拭いを巻いた上から面を被る。

籠手を嵌め、竹刀を手に再び立ち上がった時には、美妃も防具一式を身にまとい、

「桜、椿、楓、審判を！」

と命じる。

面越しのくぐもった声が響き、道場まで案内してきた二人と、壁際で控えていた一人の侍女が「かしこまりました」と配置につく。

さらに、その三人とは別の侍女が、真の背後から、「失礼します」と、胴紐の交差部に何かを縛り付ける。自分と相手を分けるための、紅白のたすきであろう。

真と美妃が試合場となる、白のラインテープで示された一辺十メートル前後の正方形の外に立つ。三方の所定の位置に、紅白二本の旗を持った審判員役の侍女も立った。それぞれの立ち位置を考えると、真は紅のようだ。

二人は互いに中央に歩み、腰を落とし、竹刀を構える。切っ先同士が触れるかどうかの距離で、面の格子越しに真は見た。

美妃^{みき}の目が細められ、静かにこちらを見据えている。それはまるで、逃げようとする野兎を全力で狩る、獅子のようだ。この瞬間、真^{まこと}はこれが試合であることを忘れた。

二人が立ち上がる。

不動の状態でありつつも、相手の雰囲気^{ふんいき}に飲まれないように、闘志を奮い立たせる。

主審が、両者を見比べ、

「始め！」

と、宣言。

「籠手^{こて}！」

火蓋が切られると同時に、真^{まこと}が動いた。

左足で力強く床を蹴り、相手の切っ先を弾き、相手の右手目掛けで竹刀を落す。

そこから「面^{めん}」に繋げる——その企みは、一瞬で潰^{つぶ}えた。

竹刀が相手の籠手^{こて}を捉えようとする瞬間、逸^それていたはずの相手の竹刀が動き、その一撃を弾く。

真^{まこと}の身体が僅かに泳いだ。

相手の竹刀は、流れるようにこちらの面^{めん}に伸びてきた。

後の先。

真^{まこと}の視界が揺れた。

「面一本！」

三人の審判員が一斉に白の旗を上げた。

一時的に、真^{まこと}は平衡感覚を失う。

あの華奢な腕からは想像できないほどの重い打撃が、真^{まこと}の脳を揺さぶったのだ。

無様に倒れるのは辛うじて避けたものの、力の差は歴然だった。

——いや、まだだ。

剣道の試合は三本勝負……まだ二本残っている。

両者ともに元の位置に戻り、再び向かい合う。

上げられたままだった白旗が下され、再度開始の合図。

真は最初から打ち込むような真似はせず、正眼の構えのまま互いに睨み合う。

その間合いは互いに一步踏み出せば打ち込める距離だが、互いの喉下に向け合った切っ先がそれを牽制する。

その姿勢のまま、二人はすり足で移動する。相手が離れれば近づき、逆に近づけが下がる――その繰り返して間合いを保ち続ける。いつまで経っても相手から斬りかかってくる気配がない。

先程と同様、こちらから打って出たところを仕留める算段だろうか。

しかし、このまま互いに打たねば、審判員から一度試合を止められる羽目になる。その場合、間合いを開けたまま構え直し、主審の宣告による仕切り直しだ。

ここで仕掛けるか、それとも仕切り直しを待って相手の出方を見るか。

そんな迷いが浮かんた直後、美妃が竹刀の先端を弾くと、同時に踏み込んだ。

いつまでも打ち込まないこちらの動きに、相手は焦れたのだろうか。

――違う。

相手は、こちらが焦れるのではなく迷う瞬間を狙ったのだ。先程の二の舞になることを恐れつつも、こちらから攻め込まないと動くことがない今の状況――そこに生まれる心の隙に、美妃は付け込んだのだ。

再びこちらの面に伸びる相手の竹刀――

それを、真は寸前のところで上げた己の竹刀で受け止める。

本来なら、そのまま返しの技を放つところだが、相手の突然の動きに付いていくのがやつとの真にその余裕はない。

美妃はさらに罅迫り合いからの面、籠手、胴を何回か放ってきたが、真はその一撃一撃を丁寧に捌く。

相手が面を最後に横から通り抜けるのに合わせ、真はすぐに振り

返る。

相手もちょうど振り返ろうとしているところだった。
すぐさま間合いを詰める。

攻守が逆転した。

真は怒涛の勢いで相手の面、胴、籠手に竹刀を振るう。

そして、次々と放たれる技を、相手は涼しげに払い、まったく寄せ付けない。

どれほど攻めただろう。

真は、面が受け止められると、下がらず、そのまま鏑迫り合いに持ち込む。

こちらはすでに息が上がりうとしていた。

相手の顔を格子越しに見た。

真の心を絶望の二文字が染める。

——こ、この訓練官は化け物か！

彼女は笑っていた。

まるで、こちらの攻めが、すべてが児戯であるとも言うように……それは、追い詰められ、抵抗を封じられた獲物を前に舌なめずりをする狩人だ。

真の全身を恐怖が駆け巡った。

真は、今一度竹刀に力を込め、相手の竹刀を押すと同時に後ろに跳ぶ。振り上げた竹刀で、下がり面を放とうとする。

だが、相手にはそんな行動はお見通しだったのだろう。

「胴！」

相手の竹刀が、こちらの胴目掛け一閃された。

防具越しに伝わる打撃。

肺の中の空気が、すべて吐き出される。

胸にまで響いた衝撃で、呼吸が一時的に止まる。

それだけでなく、真お動きも一瞬止まった。

そして、相手はその瞬間を決して逃さない。

真は、相手が「面」と叫ぶのを聞いた。

真^{まこと}が最後に見たのは、自分の頭部に振り下ろされた、相手の竹刀だった。

第七話　く試合く（後書き）

<冥府の剣第6話作成秘話および裏話>

友人から散々言われました。

1. 「電気街」の件はもっといやらしくやれ。

2. 「朱華色」ってどんな色だよ。

とりあえず、1については……仕方ないですよ。私は一度も冥土喫茶行ったことないんですから。

あと、2については下記のURLを参考にしてください。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90%E6%A3%A3%E8%89%B2>

第八話　（迷い）

真まことが目を開けたとき、最初に目に付いたのは木目の刻まれた天井だった。

身を起こすと、自分が布団に寝かされていたことに気付く。

——今朝も似たようなことなかったか？

真まことは溜息を吐くと、辺りを見渡す。

部屋の中は薄暗い。

真まことは立ち上がり、布団の傍に置かれていた上着を羽織る。

いつの間にか、服も着替えさせられていたようだ。

障子戸を開く。

外はすっかり日が暮れており、顔に当たる風も冷たい。

縁台に腰掛け、日の落ちかけた景色を眺めながら、真まことは先程の出来事を思い出した。

——あの時。

一本目を呆気なく取られ、後が無くなった真まことは相手から仕掛けられたとき、遮二無二攻め立てた。

だが、どの攻撃も相手に容易く捌かれ、相手と自分の腕の差を思い知らされた。

その負の流れを絶ち切るために、一度鏖迫り合いをして間を開けようとしたが、その時点で、すでに真まことは相手に飲み込まれていた。相手は鮮やかに二本目を決め、逆にこちらはその衝撃で気を失った。

——情けないものだ。

真まことの口に自嘲的な笑みが浮かぶ。

今の自分はどうか。赤子の手を捻るよりも簡単に叩き伏せられ、一矢報いることなく失神して布団に寝かされている……滑稽と言う他あるまい。

真まことが拳をきつく握り締めていると、

「目が覚めましたか」

と、女の声がした。

振り向くと、侍女を伴った喜三枝美妃きみえみきが、悠然と歩んでくる。

「先程は見苦しい姿を見せました」

真まことは立ち上がり、頭を下げる。

「身体の方は大丈夫ですか？」

「起き上れるぐらいには」

真まことの答えに美妃みきは一つ頷き、

「なら、もうすぐ夕食が出来上がります。母屋の方へ移動しましょうか」

母屋の方も、「ここは何百年前の武家屋敷だ」と言いたくなるほど、内装は和風だった。違いといえば、照明器具が蝋燭ろうそくなどではなくLEDで、床暖房によって畳が適度に暖かくなっているくらいか。

真まことと美妃みきは、互いに向かい合って正座していた。

美妃みきの方は、出された茶を喫くもしているが、真まことはどちらかといえば、居心地が悪そうにしていた。これは、別に部屋がやたらと広いせいではない。

「そういえば、まだ感想を聞いていませんでしたね……どうかしら、ここに来てみて？」

「……ここは、実は訓練所ではなく、時代劇のセットか何かですか？」

真まことの発言の何がツボだったのか、美妃みきはコロコロと笑い、

「面白いと言いますね」

「……自分としては、悪口のつもりだったのですが。」

それにしても、よくこんなに土地がありましたね」

「ええ、元々は夫の会社の支社が建つ予定だったのですが、経費削減で中止になりました……そこで、私が役員の権限を使って――」

「夫とは、喜三枝一郎氏きみえ いちろうのことですか？」

美妃みきは「あら」と漏らし、

「さすが警察官、詳しいのね」

「元、警察官です。それに、かの喜三枝コーポレーションの御高名は常々伺ったもので」

喜三枝コーポレーションは、二〇三六年現在もつとも日本で力を持った企業であり、様々な方面へ事業を展開し、海外にいくつもの支社を持った大企業だ。

最初に名前を聞いた時から、真は彼女が喜三枝コーポレーションの関係者ではないかと疑っていたが、まさか社長夫人とは……

「なるほど、その洞察力、うちに欲しい人材ね」

「……先程は、命知らずにも挑んで叩きのめされましたがね」

真の口調が皮肉めいたものになっていたが、美妃は気に留めることもなく、

「ご安心なさい。何ヶ月もまともに身体を動かしていない方が勝てることなどまずありませんから」

と、さりげなく美妃の方が酷いことを言った。

「そもそも、あの試合は勝敗などどうでもいいのです」

「……なら、何のために？」

「私の言葉をお忘れですか？ その人の真価を知りたければ、実際に剣を交えればいい。」

私が見たのは、貴方の腕ではなく中身です」

「中身？」

「ええ。剣の構え方、視線の動き、試合での行動……それらを見れば、どんな人間か、大体分かるものです」

一息入れ、「そして」と続けようとする美妃。

真は黙って耳を傾ける。

「貴方の剣には“迷い”があります」

「迷い？」

「ええ。貴方の剣は、攻める時は大胆に、受けに回れば虎視眈々と反撃の機会を待つ……要は、慎重でありながら、機が熟した時の爆発力を兼ね揃えている……それが、貴方の持ち味なのでしょう。で

すが」

美妃が目を閉じる。

「肝心のその爆発力……激情、あるいは決意、と言ってもいいかもしれないですね……それを鈍らせてしまうものが、貴方の中にある」

「……それが、迷い？」

「心当たりはございませんか？」

今度は、真が目を閉じる番だった。

瞼の裏に、一人の女性が浮かぶ。

「……自分が、真智明が何故死刑となったか……そして、今日あの墓地で何をしていたか……分かりますか？」

「ええ。その辺りのことは知っているわ。貴方の婚約者のことも……ね」

一応、真智明だった頃の情報は聞いているようだ。

「自分は、そこで一人の女性に出会いました」

脳裏で、その女性が泣いている。

「その人は、俺が殺した男の……その男の恋人でした」

真は目を開く。

美妃は、一見先程までと変わらない態度でいるように見える。

だが、真には、彼女の目が僅かに見開かれているのが分かった。

「その人の、涙が、悲しむ顔が、言葉が、どうしても自分の頭から離れない……」

美妃は絶句していた。

「そして、こうも思ったのです。

何故、自分は生きているのか、と」

ここにきて、美妃が再び口を開く。

「真智明は死にました。今ここにいるのは——」

「——たとえ死んでも、罪は決して消えません。明智真と名を変えても、真智明として犯した罪は決して……」

「なら、今ここで、明智真としての命を絶ちますか？」

美妃の舌鋒が鋭しくなった。

「死んでも罪は消えない……それはそうでしょう。なら、今ここで貴方が死んでも罪は消えませんか」

「それは……」

美妃の先程とは別人のような語調に、真まことは戸惑う。

「明智真」

美妃が今の自分の名を呼ぶ。

「今、貴方がすべきことは、捨てた名の記憶を引きずることではなく……今出来ることをする……違いまして？」

「出来ること？」

「そう。そして、今やることは……」

美妃が言いかけた時、

「奥様、夕食の支度が整いました」

と、侍女の一人が報告に来た。

美妃は、一度口を噤つぐみ、考える素振りを見せたが、

「……そうね。なら、まずは夕食にしましょう。」

麗うらら、運んでくるように伝えてくれる？」

「かしこまりました」

麗と呼ばれた侍女が一礼して部屋を出ていく。その後、何人かの侍女が料理を持ってきた。

食事の間、先程の話題が出ることはなかった。

第八話　く迷いく（後書き）

後書きは後から追加します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4599w/>

冥府の剣

2011年12月16日22時54分発行